

『京都一人旅』

一、夏

京都一人旅、女一人旅
恋の涙に濡れる旅、あああゝ洛東へ
重い足取り二寧坂、心せわしい蝉時雨
緑に埋まる清水に、恋を占う石ふたつ
目を閉じて石まで歩ければ、恋が実ると言い伝え
瞳を開けて歩いていても、辿り着けない悲しさに
あの人のことを思い出し、手に持つ『おみくじ』胸添える
女一人旅、心を癒す旅

二、秋

京都一人旅、男一人旅
無くした何かを探す旅、あああゝ洛北へ
紅葉染まる鞍馬寺、石段登れば仁王門
夜空を焦がす火祭りが、疲れた自分を照らし出す
生きる勇気を見失い、そっと仏像を見つめれば
遠くを睨む毘沙門天、心の闇に光射し
生き行く道を指し示す、朝明け、安らぎ、道しるべ
男一人旅、心を探す旅

三、冬

京都二人旅、夫婦二人旅
忘れかけた愛の旅、あああゝ洛西へ
雪にたたずむ竹林、柴垣に沿って道ひとつ
薄れた絆に気付きつつ、歩み続けた夫婦道
長い年月、春忘れ、愛の隙間に木枯らしが
心に冷たい細雪、道行く二人を寄り添わす
照れる夫に身を委ね、つないだ手と手に温もりが
夫婦二人旅、絆を結ぶ旅

四、春

京都二人旅、彼と二人旅
芽生えた恋が萌える旅、あああゝ洛南へ
梅のつぼみ膨らんで、枝のウグイス春告げる
はねず踊りの優雅さに、小野小町のお話偲ぶ
『百夜通い』の切なさに、小町の心へ思い馳せ
潤んだ瞳をそっと拭く、そんな君が可愛いと
肩を抱き寄せて口づけに、五百羅漢も頬染める
彼と二人旅、幸せ咲かす旅

洛西……(らくさい) 京都の西部。嵐山、天龍寺、高山寺などがある。

細雪……(ささめゆき) こまかい雪。また、まばらに降る雪。

洛南……(らくなん) 京都の東南部。東寺、醍醐寺、平等院などがある。

はねず踊り……随心院で小中学生の女の子達が小野小町を偲んでおどる踊り。「はねず」とは梅の花の薄紅色をさす。

小野小町……(おののこまち) 平安時代の歌人。絶世の美女としても有名。

百夜通い……(ももよがよい) 小野小町と深草の少将との悲恋の物語。

五百羅漢……(ごひゃくらかん) 石峰寺にある石仏群。

洛東……(らくとう) 京都の東部。鴨川(かみがわ)より東の地域。

二寧坂……(にねんざか) 清水寺へと続く道の途中にある坂の名前。

二年坂とも書く。

蝉時雨……(せみしぐれ) 多くの蝉が一斉に鳴きたてる声を時雨の降る音に見立てた語。

洛北……(らくほく) 京都の北部。三千院、貴船神社、鞍馬寺などがある。

毘沙門天……(びしゃもんてん) 北方世界を守護する神。多聞天、施財天とも呼ばれる。